

# 重力のお友だち

よこい隆

宇宙は丸いんだぜ、と、カズくんが言った。

コータロウが、奥歯を打ち鳴らした。二回。コツンン、コツンン……。コツという音が、自分の中から外に零れていく。ンンンは、頭の、中と外の間あたりに響いている。頭蓋骨が、震えている。

左手に持った地球儀を、右掌で勢いよく回しながら、「でも、宇宙の丸さってのは、四次元的な丸さなんだ」カズくんが言う。「地球は丸いだろ。だから、ずっとまっすぐ歩いてればさ、いつの間にか、もとのところに帰ってくるんだよ。宇宙もそれとおんなじ。まあっすぐに、ずうっといくと、出発したところにもどってくるんだ」

三面鏡に向かっていたコータロウのお母さんが、鏡のなか



から、カズくんの手許を見、「どうしたの、それ？」と訊いた。太陽が、傾きかけたとはいえ、まだ赤くもない時間なら、お母さんの顔は青すぎたけれど、出勤用の化粧を終えたその顔が、コータロウは嫌いではない。綺麗だと思う。

「今日の戦利品」

カズくんの科白を、ふうんと、鼻であしらって、鏡に向きなおると、ピンをはずして前髪を整えた。

お母さんより五つも年下のカズくんは、パチプロだ。お母さんとカズくんが知り合ったのも、パチンコ屋だった。

「カズくんは、難しいこと、知ってんだね。四次元だってさ」コータロウの顔を見ながら、お母さんが言った。首を回して、「四次元で、どこにあるの？」カズくんに。

コッソソソソ……

コッソソソソ……

化粧をした眼は、大きく見えて、化粧をしていないときよりも、クルクルとよく動くようだった。カズくんは、なにも言わない。コータロウが地球儀に手を伸ばすと、怒った顔で睨んだ。

「下手に触っちゃ駄目なんだ。これからお母さんは仕事だろ。下手に触って、地球の自転が狂ったら、時間も狂っちゃうんだぞ。お母さんが遅刻したら困るだろ」

コッソソソソ……

コッソソソソ……

「コータロウがいるところかどこだか、わかるか？ ちゃん

と当てたら、地球のことがわかってるんだから、触ってもいいぜ」

「まだいつつなのに、そんなのわかりっこないじゃん」と、お母さんは言うけれど、幼稚園にも保育園にも通わせてもらっていないコータロウが、それでもわかるかもしれないと思つて、見せてと言つてみた。

カズくんが左手に台座を持つてコータロウの眼のまゝに地球儀を差し出し、右手でゆっくりと地球をまわす。「コータロウがいるところに来たら、指させよ」

「赤いところよ」お母さんが言った。

「なんだよ、つまんねえな。そういうのを、才能の芽を潰すつて言うんだぜ。もしかしたら、コータロウは天才かもしれないのに……」

「バーカ。おそわらないでわかったら、天才じゃなくて超能力だよ」

コッソソソソ……

コッソソソソ……

「超能力だつて、天才じゃん」

自転をうながす手をとめたカズくんのまゝで、自分のこととも、地球儀のことともつかぬ、ふたりの声を聞いていたコータロウは、その夜死んだ。

お母さんが出勤したあとで、眠くなつてもなおカズくんにかまわれていたが、眠気で駄々をこねていたのかもしれない。カズくんの顔から頬笑みが消えていたのになにかを言つて、

それでもカズくんが、「しつこい、いいかげんで寝ろ」と言  
いながら足をあげたときには、額を小突くつもりが、思わぬ  
力がいり、鼻骨の辺に踵があたった。あたると、鈍い音が  
してめり込んだ。とたんにコータロウの鼻が上を向いて、血  
を噴き、あつけなく仰向けに倒れた。上目になって、なにも  
見ていない。鼻血はドクリドクリと脈を刻みながら溢れ、口  
を開けて、身体はビクンビクンと数回跳ねた。カズくんは、  
その回数を感じていないし、数えてもいない。カズくんがた  
だ呆然と見ているうちに、コータロウの身体は動かなくなる。  
それでも、鼻血はしばらくタラタラと湧いていた。流れ、カ  
ーペットを染めて、投げ出されていた地球儀に届きそうだった。

ダイニングの椅子に座っていたカズくんは、近づく蹻音を  
それと聞き分けて、どんな顔をすればいいのかわからず、う  
なだれ、頭を抱えた。カズくんの眼のまえには、地球儀が立  
っている。案の定、蹻音はドアのまえで止まり、鍵を開ける  
金属音がした。

「なに、これ……」  
「死んじゃったよ」

「わけ、わかんない……」と言って、しばらく立ち尽くし、  
カズくんが、深夜になるといつでも耳に障る、遠くの国道を  
間断なく走る地鳴りのようなかすかな音をようやく聞いたと  
き、お母さんは、ハンドバッグを乱暴に、物が触れ合う音を  
たてて探り、携帯電話を手を取った。

「どうするんだよ？」

「しらないわよ」

「どこに電話するんだよ？」

「わかんないのよ。どうすればいいのよ？ あたしが訊きた  
い。教えてよ」無表情とは違う、だけど、どれともお母さん  
自身が決めかねているらしい顔で、カズくんを見た。

「そうだ、救急車。救急車、呼ぶ」

「もう、死んでるんだよ」

もういち度お母さんがカズくんを見つめた。国道の地鳴り  
のような音は、もう耳にとどかない。お母さんの口が開くと  
息を吸い、大きな声をあげると思ったカズくんはその口を塞  
いだ。お母さんはもがき、カズくんが抱きしめて抑えると、  
腕のなかで暴れた。コータロウの足許に、お母さんのハンド  
バッグが落ちてきた。

「暴れるなよ。外に聞こえるよ。……お願いだよ。暴れない  
でくれよ」

お母さんの熱い鼻息が、カズくんの親指を濡らした。カズ  
くんが触れているお母さんの肌は、カズくんの肌に、じっと  
りと絡みついている。そのままズブズブと、めり込んで、融  
けていきそうだった。コータロウの足許に、ハンドバッグか  
らこぼれ出た携帯電話や口紅が散っている。コータロウの身  
体は仰向けで、鼻血に染まった顔は、コータロウの顔のよう  
ではなく、それでも、身体は人間の形と、肌の柔らかさを見  
せている。

今すべきことを見失っていたのは、お母さんだけではない。カズくんだって、お母さんが帰ってくる今の今まで、なにもしないでいた。だから、お母さんがなにをするともつかずに暴れて、むしろ、カズくんは自分のすべきことを見つけた。

胸の上下は大きいまま、動きがとまったお母さんを抑える手を緩めると、お母さんの右手が口を塞いでいたカズくんの手に触れた。その仕草がゆっくりで、どうやら、もう大丈夫だというようだったから、カズくんもすなおに手をどけた。

「あんた、なに冷静になってるの？ コータロウが死んでんでしょ？」コータロウを顎でしめして、「これ、あんたがやったんでしょ？」言うのと、コータロウの靴下を履いたつま先のすぐ先に落ちていた携帯電話を拾い、「警察に電話する」お母さんが言った。

カズくんは、お母さんの携帯電話を叩き落としました。

「お願いだよ。助けて」

以前は散らかっていた部屋だけど、カズくんが、パチンコの調子がよくないと部屋の掃除をするから、今、投げ出されたお母さんのハンドバッグと、コータロウから流れ出た血、それから放り出されままでのコータロウの身体だけが、部屋の秩序を乱している。夏は過ぎて風が吹く季節なのに、やけに蒸し、部屋の空気が肌に粘る。コータロウから湧き出てカーペットを黒く染めた血が蒸発し、部屋を満たしているのかもしれない。

「オレ、仮釈中なんだよ。過失だって、実刑になっちゃうん

だよ」

やけにゆっくりと、お母さんが屈み、携帯電話を拾う。

「コートくらい脱げよ」お母さんは、春秋用の薄いコートを着たままだった。屈んだ姿勢のまま、首をひねって、カズくんの顔を見上げたお母さんの顔は冷たい色だった。カズくんは、お母さんの身体を抱えるように押し、コータロウの脇を抜け、そのまま隣の部屋にいくと、ベッドに押し倒した。カズくんは、それが自分の恐怖の証拠のように、自分の昂ぶりをお母さんにしめた。昂ぶっているようでも、怖がっているようでもありながら、ただそう見せるためのようでもあった。カズくんにも、自分が昂ぶっているのか、怖がっているのか、それともそう見せて、お母さんを騙そうとしているだけなのか、わからない。カズくんは、お母さんを縛った。お母さんは縛られていた。

コッソソソソ……

コッソソソソ……

一度果てると、お母さんがなにか言いかけたから、カズくんはまた、掌でその口を覆った。お母さんは縛られたまま、おとなしくして、カズくんが手をどけても、なにとも言わなかった。それでも、カズくんは抽斗からタオルを出すと、猿轡を咬ませて、うつ伏せにし、腰から下だけベッドからおろして、後ろから犯した。そのあいだも、猿轡と縄をほどいた三回目にも、ずっとカズくんは、「助けてくれよ」とか、「怖いんだよ」といい続けて、「おまえだって、コータロウさえい

なければって言うてたじゃないか」とも言った。コータロウは、お母さんのそんな科白をしらなかつたけれど、お母さんも、カズくんが仮釈放中だということをしらなかつた。きつとしないことがほかにもたくさんあるのだろうと、お母さんは思った。お母さんは、ほかにもいろいろなことを考えて、おそらく、カズくんよりよほどたくさんのお母さんのことを考えた。

昼をとおに過ぎてからゴトゴトという重たい音に眼醒め、ガムテープでぐるぐると巻かれたページジュの毛布を見て、お母さんには、大きな糞虫のようなそれが、すぐにそれとわかつた。カズくんは、カーペットの染みを、濡れたタオルで叩いている。

「取り替えないと駄目だな。でも、すぐじゃ駄目だ。すこし時間をおいてからじゃないと」

「近所で聞かれたら、お母さんに預けたつて言うわ。あなたが邪魔にするからつて、言うからね」

カーペットのことかと思ひ、そんなはずはなく、上を見上げてすこしだけ考え、「オレは邪魔になんかしてないぞ」

お母さんが睨んだ。カズくんは、「わかつた」と言つて、下をむいた。

お母さんの眼の周りは真つ赤に腫れていた。身体は、まるで南国の生き物のように、赤かつたり青かつたり、黒ずんだところもあつて、彩り豊かな痣だらけだつた。だけど、毛布のなかのコータロウの背中が、ずつと仰向けだつたから、血

が下がり鬱血して、真つ黒だつた。

カズくんは、お母さんの科白を聞いて、なにか変だなと思つた。お母さんは、昨夜カズくんが言つた「おまえだつて、コータロウさえいなければって言うてたじゃないか」という科白を思い出してた。いつたいいつ、どうして、そんなことを言つたのだろうと思ひながら、顔を洗つた。コータロウの顔には血が固まつて、そのすぐ横には、同じくらの大きさの地球がある。カズくんが、地球儀をコータロウの頭の隣に置いたのだった。

赤い眼は、目薬を注せばなんとかなるかもしれない。赤みも化粧で誤魔化せるだろう。だけど、目蓋の腫れはどうしようもない、と、お母さんは歯を磨きながら思う。夜までに腫れが引くとも思へなかつた。仕事をどうしようか。

「この顔じゃ、仕事にならない」声を出して言うつと、

「休まないほうがいいんだけどな。……しかたないよな。休めよ」いつの間そこにいたのか、すぐ後ろから鏡越しに見て、カズくんが言つた。

夜の十時を回ると、カズくんが借りてきたレンタカーで北西の方角へ向かつた。カズくんが運転し、助手席にお母さんが乗つた。カズくんは、お母さんにこなくていいと言つたけれど、お母さんがいくと言ひ張つた。コータロウを後部座席に乗せようとしたカズくんは、もし検問にでもあつたらどうするのか、と言つて、トランクに乗せたのはお母さんだ。

おおよその目的地はあつたらしく、走りはじめてしばらくは、迷いなく進んだ。お母さんは十分おきに煙草を喫い、カズくんはなぜか全然煙草を喫わなかつた。お母さんがラジオをつけるのと、カズくんは消してくれと言つた。「今、事故を起こしたら一巻の終わりだからな。運転に集中していただきたい」

お母さんは鼻を鳴らして、「気が小つちやい。退屈よ。音楽でも聴きたいわ」

「だからついてくるなつて言つたんだ」

カズくんは、さすがに法定速度を守つていたわけではないけれど、すこしばかり手前で信号が黄色になればブレーキを踏んで、たしかに安全運転だつた。まして、道路わきに高い木が茂りはじめると国道を逸れ、やがて道幅が狭まり、曲がりくねつた上り坂にはいると、どこもかしこも真つ暗で、時に法定速度を下回つて、後ろに車がくれば脇に避け、先にかせる慎重さだつた。たまらず、「なにトロトロ走つてんのよ」お母さんが苛立つた声で言う。ライトを上向きに切り替え、「真つ暗だな」カズくんが言つた。お母さんがカズくんを見ると、カズくんはハンドルのしかかるように前のめりになつて、フロントガラスの前をキョロキョロと窺つていた。硬直したコータロウの身体は、トランクのなかで、ゴロゴロと音を立てている。地球儀は、コータロウの頭に密着しながら、軸がカタカタと、コータロウの耳許で鳴り、ときにコータロウの顔を撫でて、固まつた血を剥いでいる。赤黒い、魚

鱗のような薄片が、コータロウの頭の下に溜まつていつた。

鋭いカーブの突端で、カズくんが車を止めた。お母さんがダッシュボードの時計を見ると、十二時半だつた。「その時計、十五分ぐらい遅れてるぞ」カズくんが言つた。

カズくんが車を降りると、ドアを閉める音が重く響いて、真つ暗ななかをどこまでも流れながら、闇の重さと溶け合い、いつまでもそこにある。お母さんは、その重さに潰されそうで、窓をすこしだけ開けると、車のなかで煙草を喫つた。喫い終えても、フロントガラスの向こうに、車のライトに浮かび上がったガードレールと闇黒を見つめたまま、動かず、すぐにまた煙草を抜いた。カズくんも、お母さんに眼をやらす、喫い終えた煙草をガードレールに押しつけて消すと、その先の闇に飛ばし、車の後ろに回つた。そして、糞虫みたいなコータロウを引き出した。ガムテープには、持ちやすいように、二箇所を持ち手をこしらえてあつた。

コータロウの身体は、カズくんの周囲を二度回つて勢がつくと、頭と地球儀をまえにして、フワリと宙を飛んだ。すこし傾げた。脛に木の幹があたつた。とたんにバランスをうしなつたコータロウは、つぎの幹に頭を打ちつけた。細く尖つた枝が、絶えずコータロウを突いた。腐葉土の枯れた音がコータロウの身体を包み、コータロウは、名もしれぬきのこをなぎ倒しながら、急な傾斜をころがって落ちていつた。地球は丸いから、どこまでもまっすぐにいけば、もとのところに戻つてくるのだと、カズくんはコータロウに言つたのだつ

た。毛布の外には、冴え冴えとした闇。

コッソソ……

コッソソ……

四本目に火を点けようとしたお母さんの手が震えている。歯の根が合わずに、カツカツと鳴った。乗り込んだカズくんが身をすくめ、「寒いな」と言う。車中は、煙草の煙が層を作って揺れている。煙草臭い。車のなかの煙草臭さは、鼻粘膜から頭のなかに浸みこんで、子どものころにはいつも車酔いを起こしたのだったと、カズくんは思い出し、眉をしかめた。

「ここって、どの辺？」

「よくわかんないけど……」といいながら、「ここ」と、カーナビを指差した。お母さんは、そこにカーナビがあることをしっていたし、眼にはいつていたはずなのに、まったく気づかないように、それを見ていなかった自分に気づいた。ずっと、なにも見ず、なにも感じず、なにも考えていなかった気がした。

「胃が痛い。お腹空いた。今日、なにも食べてないもん」

「国道まで出ないと、なにもないだろうな」

ふたりを乗せた車が、何度かハンドルを切り返してUターンすると、坂を下って去った。

まだコータロウは安定せずに、ときおり、枯葉を毛布に絡みつけながら、斜面をずり落ちて、そのたび地球儀の支柱がカラカラと鳴り、コータロウと地球儀のさまは、ますます衰

虫に似た。

「仮釈放って、なにやったの？」

国道沿いに見つけたファミリールレストランで向かい合い、海老ピラフのグリーンピースをよけながら、お母さんが訊く。「いいじゃないか、そんなこと」

お母さんは、顔をあげかけて、ふと眉間に深々と皺を刻み、自分の皿を覗んだ。「馬鹿じゃん」カズくんにも聞こえないように、小声で言つて、よけたグリーンピースをスプーンに掬うと口に運んだ。皿のなかで、グリーンピースの反対側には海老ばかりが集まっている。ファミリールレストランで、コータロウは子ども向けのメニューを嫌い、すぐお腹が空いていけばハンバーグ、そうでなければ海老ピラフを注文した。けど、グリーンピースは、お母さんもコータロウも、ふたりとも大嫌いだった。大嫌いなグリーンピースを、お母さんが食べている。

「今から海にいくから」カズくんが言った。「潮風に当てる、洗車しなきゃいけないから。車についた土とかで、足がつかないように、洗車するんだ」

「洗車するなら、いかなくたって、いったことにすればいいじゃない」

「むこうで飯喰ったりして、たしかにいったっていう証拠を残しておくんだ」

「さすがは前科者ってこと？」

お母さんは皮肉のつもりだったのに、カズくんは照れたらしく、笑い顔になった。お母さんは、もしもコータロウが見つかったなら、そのときはもう終わりなのだと思っていた。カズくんの小細工など、車の走行距離を見れば、すぐにばれる。それでも、カズくんにつき合ってやろうと思つて、なにもいわなかった。それなのに、思いついて口にしてしまった。「レンタカーなんだから、ほつといつても洗車するんじゃない？」

カズくんが驚いた顔になつて、お母さんを見つめた。「でも……」なにかを言いかけて、さきが続かなかつた。

「いいよ。わかつた。そのかわり、あたし、車のなかで寝てるからね」

ずいぶん乱暴な運転で急いだのに、風に乗つて砂浜の砂がアスファルトの上を薄くおおつた駐車場に車を止めたときには、夜は明けていた。お母さんは言つたとおり、カズくんは背中を向け、丸まつて眠つている。砂浜に、焚き火が燃え、背を丸めた女が膝を抱えて座つている。その視線のさきを見ると、サーファーが板に乗つて、沖を目指している。サーファーは彼だけでなく、ほかにもいた。浜茶屋の骨組みが、焼け跡のようで、海辺を空恐ろしく見せる。砂浜につづくコンクリートの階段を、砂の膜が滑るから、カズくんは慎重な足取りで降りる。慎重だったはずなのに、カズくんの身体が飛んで、砂浜に前のめりに倒れた。なにが起きたのかわからず、

ただ驚いていた。

「飛んだね。うん、すごく飛んだ」

倒れたまま、声に振り返ると、お母さんが階段のどちゅうで、笑いながら見下ろしている。背中に手の感触があつた。突き飛ばされたとき、ようやく気づいた。カズくんは、なにも言わずに立ち上がり、パンパンと音をたてて服の砂を払うと、お母さんを睨みただけれど、お母さんに睨みかえされて視線をそらした。

「なにすんだよ」

お母さんは、聞かえなかつたように、カズくんの横をすり抜けて焚き火に近づいていった。薄汚れた雲が空を蔽つていく。

「サーファーの彼女つて、虚しくない？ 自分ばかり楽しく遊んでる男に置いてけ堀喰わされて、自分は寒い思いしながら、丸まつて待ってるだけなんてさ」海を見ながら言つて、

言い終わつてから、膝を抱えた女に笑顔をむけた。

「虚しいよ。だから、いつもなにも言わずに、ひとり帰っちゃうもん」

「火、あたらせて」

「勝手にどうぞ。でも、もう話しかけないで」

若い娘のタメ口にお母さんは切れもせず、黙つて火に手をかざした。気づいて、人差し指で、油脂を掻きとつた。波は、頰爛の泡だちを波打ち際まで運んで、足を踏み出しかけたカズくんを寄せつけない。



「ねえ、ここにくるまで、迷子になったことにするんだよ。

近道しようとして、国道逸れたら、どんどんわかんない道に迷い込んで、あたしたちは、グルグル回ってたんだよ」

お母さんが、大きな声で、カズくんに言った。カズくんの眼が大きく開いて、膝を抱えた女とお母さんのあいだをいつたりきたり。お母さんは、笑っている。

「あたしたちがあ、まっすぐここにきたならあ、車の走行距離が長すぎるでしょお。だからあ、あたしたちはあ、ずうっと迷ってたの。わかったあ？」

沖のサーファーにも聞こえよ、とばかりに、声を振り絞る。

「そんな大声ださなくても、聞こえるよ」

「波の音で聞こえないかと思って」

「それより……」女を眼で示す。

「ねえ、もしあたしたちのこと、テレビとか、どこかで見かけても、きょうここであたしたちに会ったこと、だれにも言わないでね」お母さんが、女に言う。お母さんはずっと笑ったままだ。女は膝を固く抱えて沖を見つめたままだ、お母さんの科白は海から寄せる風に流されてしまう。

ふと、女の眉間が寄った。

「女連れのサーファーが下手糞って、カッコ悪い。それも、ほかに女連れがいないなんてさ」

女の視線を追って、沖を見ると、板の上に乗った男の腰つきが、見るからに覚束ない。

「カッコ悪い男と一緒にいるのって、女の恥じゃん。安物の

アクセミたいだよ」

「男は飾りじゃねえだろ」と言ったのは、カズくん。

「彼氏もおなじように思ってるんじゃない？ オレより上手いみんなが女なんか連れてこないのに、下手糞なおれが女連れてるなんて、カッコ悪いってさ」お母さんの科白に、女が振り返って顔を上げた。

「そうかもね。じゃあ、あたしはいないほうがいいんだ」立ちかける。

「でも男は、女がいれば、すこしでも早くうまくなるうって、必死こくんだよ。すこしでもカッコよく見せようと思つて、頑張んだよ」

「だったら、カッコよくなってから、見てやるよ」女はそのまま立ち上がると、「男は選ばないといけないよね」と、誰にともなく言つて、お母さんにもカズくんにも、沖の男にさえ眼もくれず、海に背を向けて歩いていった。前かがみがいかに砂が重そうに、まるで落し物を探しながら。

突然思いついたお母さんが、走って、小柄な女の肩を抱き、「ねえ、この辺で美味しいもの食べれるところ、案内してよ。ご馳走するからさ」

「馬鹿じゃねえの？ この時間に開いてる店なんて、二十四時間営業のファミレスぐらいじゃん。海の幸とか喰いたいなら、出直してきな」

山の陰からようやく顔をだした陽の光を、コートロウが、木の葉越しに受けた。毛布にも遮られて、それでもわずかな

光がコータロウに届いている。活動をはじめた微生物たちの気配を慕って、小さな虫たちが葎の隙間から潜りこみ、コータロウを吟味している。虫たちは、地球儀には眼もくれず、コータロウにたかる。

お母さんは、女の肩から腕をどけた。

「ちよつと待てよ」

海から上がった男が、板を投げ出して、女を追った。

携帯電話のタイマーが鳴って、車のなか、カズくんが眼醒めた。むこうを向いて丸まった助手席のお母さんもモゾモゾと動き、どうやら起きているようだったけれど、そのまま。カズくんは黙って、エンジンをかけた。お母さんが、今夜は働くといったから、タイマーは十時に設定し、三時間程度しか眠っていない。カズくんは、ガラス越しに周囲を見回して、駐車場の果てに自動販売機を見つけた。エンジンをかけたまま、車を降りると、煙草に火を点け啞え、眼をこすりながら、自動販売機に向かった。こすつても目蓋が粘つて、カズくんは、しばたたく。うつむいて、小指の先で眼の淵をなぞり、油脂をかいた。うなじにポツリと冷たい点が落ちた。仰ぐとすぐそこに、雲が覆っていた。使い古した雑巾色の雲だ。四回、雨滴を顔に受け、両掌で水気を顔にまぶした。カズくんが二十メートルほどの距離を歩き、自動販売機に辿りつくまで、堤防の影の湾岸道路を、三台の車が走り去った。一台は重たい音をたて、大きなトラックのようだった。波の音もか

すかで、カズくんの周囲はやけに静か。自販機で、落ちてきた缶コーヒーが、静けさを破った。

ふたつの缶コーヒーを片手に持つて、啞えていた煙草を手にとると、雨滴の染みがあった。かまわず啞えなおす。カズくんの視界の隅で、砂浜に続く階段を男たちが昇ってくる。男たちは、ウエットスーツにサーフボードを抱えている。だけどカズくんは彼らのことなど気にかげず、ひとりの男が近づいてくるのもしらない。

「まだいたのかよ」

近づいた男の声に、カズくんが顎をあげた。まさかと思いつながら見渡しても、どうやら男はカズくんに言うらしい。

「おまえら、かなえになに言ったんだ。なんで、かなえ、帰つちやつたんだ？ あいつ、オレのこと無視したんだぞ。無視して、とつとといつちやつたんだぞ」

サーファーたちが、男の後ろに集まっていた。

「しらねえよ。オレらは、火にあたらせてもらっただけだ」

「ふざけんなよ」

車を見たが、お母さんの姿は見えない。

うんざりした顔で、「かんべんしてくれよ」とカズくんが言う。「騒ぎ起こしたくないんだよ」

「面白くねえな。オレの気がおさまんねえよ」

後ろの男たちは、たがいに顔を見合せて、小声でなにごとか話しているけれど、カズくんには聞こえない。

「詫びろよ」

後ろには、ニヤニヤと笑う男がいる。だけど、言う男は、笑っていない。

「なんで？」驚いたように、カズくんが思わず訊いた。

「オレの気がおさまんねえから。土下座して詫びろ」

カズくんは、手にしていた煙草を捨てた。すっかり短くなって、火がフィルターにとどきそうだった。雨は、ゆっくりと降りを含めてきた。男たちは海からあがってきたのだからはじめから濡れている。雨など気にならないだろう。だけど、なぜオレがこいつにつき合って濡れなければいけないのか、と思うと、カズくんは、腹がたつてきた。そのうえ、男は土下座しろとまでいう。濡れたアスファルトに膝をつけと言う。それでも、ゆうべあの女を犯すようにやりながら、視界の隅にコータロウを見ていたから、膝をつき、缶コーヒートを傍らに立てて、土下座をしてみせた。後ろの男たちは、驚き、笑った。男を見上げて、「これでいいか？」コータロウは、お母さんがなにをされても、黙ったまま動かなかった。

男の顔は、呆れていた。

「ありえねえ」

お母さんは眼醒めていたけれど、リクライニングが倒れたままだった。お母さんが土下座のわけを訊き、見られたと思っていなかったカズくんは慌て、それでも話すと、お母さんが言った。

「ぶん殴ってやろうかと思ったけど……、騒ぎおこしたくなかったんだよ」

コーヒートのひとつをお母さんに手渡し、髪をしごいて雨水を払った。

「ずっと、そうやって生きてく気？」

カズくんはすこしだけ考え、「きょうだけだよ。あしただったら、ぶん殴ってたさ」

「いいじゃない。ずっとそうやって生きてけよ」

嘲弄するらしい口角をあげたお母さんの声を聞いて、無然となりながら、黙ってブルトツプを引いた。お母さんの物言いがやけに乱暴だと、そのとき気づいて、お母さんの顔を見たら、缶コーヒーをおおっている。ぬるいと思いがら、言わずに、一気に飲み干す。カズくんは、飲みかけをホルダーに置き、エンジンをかけた。

晴れたままの山のなかは、陽を浴びた木々や土が水分を吐き出して、純白の霧がユラユラと立ちのぼっていた。コータロウの身体は、微小な生き物たちの忙しい作業場と化していた。生き物たちは瞬間ごとに増殖している。また、それよりも大きな生き物たちは入れ替わり立ち代り、コータロウをすこしずつ運んでいく。しだいにコータロウは、蓑をすり抜けて、地に滲みだし、溶けていく。微小な生き物たちの活動で蓑のなかは熱を帯び、山から立ちのぼる霧に紛れて、コータロウの蓑からも白い湯気が起っていた。蓑のなかで、発する熱にもむらがあり、かすかな気流が立っている。気流は、コータロウに寄り添う地球儀に雲を起し、雨を降らせる。

野犬が、匂いを嗅ぎつけている。

傍らの窓の向こうは、激しい雨が降っている。空から水が、地表に引き寄せられている。地が呼ぶ声は強く、雲は抗いようもなく、ダラダラと垂れ流している。

鯛の活き造りが口をパクパクさせて、コータロウは怯えた。以来、焼き魚の口を恐れ、眼を恐れ、やがてすべての魚を怖がり、切り身さえ食べなくなつた。お母さんの好きな寿司も嫌つた。寿司なら、玉子焼きでさえ、魚のように思つて食べなかつた。コータロウさえいなければ、寿司が食べられる。カズくんがいった、お母さんの「コータロウさえいなければ」という言葉とは、寿司や魚が食べられることではなかつたか、と、浴衣姿のお母さんが刺身をつまみながら思う。これからは、魚が食べられる。

それならコータロウは、あたしが魚を食べたいから、死んだみたいだ。そうじゃない。あたしのせいじゃない。

それでも、コータロウの死が隠されたのは、お母さんのせいでもある。だからこそお母さんは、これからは、コータロウがいたせいでできなかつたことをしようと思う。そうしなければ、なぜ隠されたのか、コータロウが隠れてしまった意味がないじゃないか。

温泉に浸かつて温まった身体で、窓の外の雨にけぶった景色を見る。けぶつて、なにも見えない。降る雨ばかりが視界を埋めている。ビールのせいかもしれない。今夜は働くつも

りで、これから帰るから、カズくんは呑んでいない。

コータロウがいたらできなかつたことってなんだろう。コータロウがいないから、できることってなんだろう。

コツンン……

コツンン……

お母さんは、カズくんに復讐しようと思った。復讐といっても、今はまだ、なにをすればいいのかわからないけれど、窓の外、降りしきる雨を箸を啜えてぼんやり眺め、復讐するのだと決めた。

カズくんは、箸を持ったまま、うつらうつらといねむりしている。赤身の刺身が醤油に浸つたまま、浮いた脂が金属のように光っている。

コータロウも雨に打たれているのだろうかと思うと、お母さんの口のなか、顎骨と頭蓋骨のつけ根あたりがくすぐつたくなり、頬が引き攣つた。お母さんの顔のそこかしこから、水が溢れ出ようとする気配だった。鼻梁のわきには、山葵が沁みたように突き刺す痛み。ゆるい涙水が流れそう。だけど、泣いてはいけない気がした。泣いたら、コータロウを卑しめる気がした。山葵をたつぷり盛つて、はまちを口に入れた。鼻の頭に突き刺さる痛みが襲い、さつきの痛みとは全然違うと気づいた。さつきの痛みなんて、ただむず痒いだけだ。

規則的にワイパーに払われた雨水が飛ぶ。気がつくつと、ワイパーの動きを追つてガラス面を見つめ、その先を見ていな

かった。前を走る軽トラックが、眼のまえに迫っていた。なんでもない素振りを装いながら、じつは、カズくんはあわててアクセルから足を離れたのだった。タイヤが路面に張った雨水を蹴散らす音が、ずっと聞こえていて、まるで耳を塞がれている気がする。閉じ込められている気がする。水底を走っているようだった。水深はどこまでも深まり、やがて水圧で、屋根が潰れる。きつと。

くだらないことばかり考えているうちに、いつの間にやら、見慣れた景色に包まれて、だけど、車中から見るとそこは、見慣れた住宅街ではなく、ハンドルに凭れて眺めた。歩いているときに雨なら傘を差し、足許ばかりを気にして、ちゃんと見ていなかった。お母さんが、仕度を終えたら駅まで送れというから、そのまま待ちながら、カズくんは、いまさらながら、いつもの町並みが、雨にけぶる姿を見ている。

店まで送るといつてもそうはさせず、小さな駅前のロータリーに車を止めると、あたしが帰るまでに出ていけと言う。二度とその顔を見せるなとまで言う。カズくんが、返す言葉を見つけれずにいたら、雨のなか、傘を開くと、駅を目標として走ってしまいました。だけど、それがお母さんの復讐だったわけではない。復讐はこんなもんじゃなくとお母さんは思う。それならお母さんは、二度と会わないとお母さんくんに、なにをするつもりなのか。お母さんにもわからない。しかたなくカズくんは、すくない荷物を運んで、まだ借りたままだった隣駅のアパートに帰った。

薄汚れた野犬が、蓑の上から、コートロウに鼻先をすりつけ、そのたびヒクヒクと鼻梁に皺を寄せる。もちろん、お母さんもカズくんも、それをしらない。野犬が毛布を啜えて首を振ると、コートロウの頭が地球儀に当たって音をたてた。そのとたん、野犬は足を滑らせ、傾斜を転げ落ちていった。コートロウはまた、取り残された。お母さんは、客が手を握るから、両手を添えて握り返すと、作業服姿の男は口説きかかって、ふと「あたし、子持ちよ」と言ってみた。男は、上を見上げてなにごとか考え込む仕草を演じてから、「オレなんか、妻子持ちだよ」男の作業服は、男の体臭に雨の匂いを絡ませている。

やがてコートロウは、眼に見えぬ小さな生き物たちに分解され、昆虫たちに運ばれて、地球に溶けていった。

明日のために、閉店間際のパチンコ屋で出ている台を確認してから、コンビニに寄ったカズくんが、パチンコ雑誌を立ち読みしていた。脇に求職情報誌を挟んでいる。立ち読みといても、パラパラとページを送り、眼にとまる記事を見つけれず、パチンコ誌を棚にもどすと、弁当の棚を一渡り見渡し、コロッケ弁当を手にとった。コカコーラのペットボトル、コロッケ弁当、求職誌、それからタバコをワンカートン袋をぶら下げ、カズくんがコンビニを出る。しゃがみこんだ若い男たちが四五人、円陣を組んでいた。楽しいわけじゃな

い、カズくんはそれをしっている。することがないから、そうしているだけだった。そんなことをしていると、オレみたいになっちまうぞ。子ども殺しちまうような馬鹿になっちまうぞ。殺そうと思ったわけじゃないし、殺したいと思ったことなど一度もなかった。ただ、そうなつてしまっただけだった。遠回りに堤上の道を歩いていた。街灯がなく、月明かりだけの真つ暗で、左手には大きな川が流れているはずだけれど、ゆるやかな流れに音はなく、右手の住宅街にも音がない。提の下をときおり車がゆきすぎる。あまりに静かだから、カズくんは、なにか歌でも唄ってみようと思った。口を開いて、なにを唄うつもりなのか、アテがなく、口を開いたまま、声が出ない。

提を、葦が茂る川側に転げ落ちた。カズくんは、足を滑らせたのだと思った。けれど、「落ちたぞ」という声が聞こえ、葦を掻き分けて近づいてくる数人の気配があったし、脇腹の痛みにも気づいた。

頭を抱えて、身体を丸めた。なにもできないから、とにかく、急所を守るだけだった。背中を蹴られるなら、たいしたことにはなかつたけれど、ときに脇腹を踏みつけるように踵で蹴られて、肱で庇おうとすると、額を蹴られた。カズくんは「なんなんだよ」とくり返し呟いていたけれど、男たちには聞こえなかった。「なんなんだよ」とくり返しながら、口許がひきつって、泣きたいのだと思ったら、とたんに涙が溢れ、肩が震えた。カズくんの震える肩に気づいたひとりの男が、

かみこんだから、カズくんはしゃくりあげながら、「なんなんだよ」と怒鳴った。

「ベソかきながら息がつてんじゃねえよ」といつて、平手でカズくんの横面を張った。「てめえ、さつきコンビニでガンくれたろうが……。むかついたんだよ」

カズくんは、涙のせいなのか、それとも脛が腫れているのかわからなかつたが、眼が見えなかつた。それとも、男は土手の上の街灯を背負っていたのだから、ただ逆光で見えないだけだったかもしれない。

男たちが去っても、カズくんは動かない。痛いというより、身体が重たかつた。痛みすら感じなくなつて、動けず、このまま死ぬのかもしれないと思いつながら、それでも、今は動きたくなかつた。じつとしていたかつた。このまま死ぬのなら、それはそれでいいから、とにかく今はこのままでいたかつた。

風が吹いたり、枯葉が降り積もつて流れたり、すこしずつなにかが起きて、ふとコータロウの頭と地球儀がコツンと音をたてる。ときには、コータロウの顎が動いて、コツンコツンと鳴る。気が向くと、地球儀がカラカラと音をたてて回つた。コータロウは、その音につれて、いかにも楽しげに笑うようだった。

病院で、お母さんはカズくんの様を大きな声で笑つた。コータロウがそれと見分けられなくなるほどひさしぶりに会つたのに、「ざまあみる」と言つた。